

水まわりの事故

浴槽へ転落し溺れる

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 子どもが浴室に入ってしまう、浴槽をのぞき込み転落し、溺れることがあります。
2. 入浴後は、浴槽の水を抜き、浴室には外鍵を付けて子どもが入れないようにしましょう。



入浴時に大人が目を離して、溺れる

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 大人が洗髪している時や、着替えを取りに行ったり、電話に出たりしている時など、目を離した間に溺れてしまうことがあります。
2. 大人が洗髪中は、子どもを浴槽から出しましょう。
3. 少しの間でも子どもから目を離さないようにしましょう。



洗濯機、バケツや洗面器などによる事故

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. バケツや洗濯機などにたまったわずか10cmの深さの水でも溺れるおそれがあります。
2. 使用後の洗濯機から、水を必ず抜いておきましょう。
3. バケツや洗面器の水の量が少なくても、近くに子どもを1人にしないように注意しましょう。



ビニールプールやプールでの事故

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 大人が少しの間、目を離した時に、子どもが溺れてしまうことがあります。
2. プールで遊ぶ時は、必ず大人が付き添い、子どもから目を離さないようにしましょう。



海や川での事故

2歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもだけで海や川などで遊ぶことがないように注意しましょう。
2. 遊ぶ時はライフジャケットを着用させ、必ず大人が付き添うようにしましょう。
3. 転落したり、溺れたりする危険がある場所がないか確認し、危険な場所で子どもが遊ばないように注意しましょう。



ため池、排水溝、浄化槽での事故

2歳以上

< 注意ポイント >

1. ため池、排水溝、浄化槽など、転落したり溺れたりする危険な場所がないか確認しましょう。
2. 危険な場所で、子どもが遊ばないように注意しましょう。



やけど事故

お茶、味噌汁、カップ麺などでのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 高温の飲み物や汁物を扱う時は、子どもの手が届かないよう注意しましょう。
2. テーブルクロスやテーブルマットは、子どもが引っ張って、その上に載った容器を倒す原因になりやすいので使わないようにしましょう。



電気ケトル、ポット、炊飯器でのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 電気ケトルなどにつかまり立ちをしたり、コードを引っ張ったりして倒してしまい、熱湯を浴びてやけどをすることがあります。
2. 電気ケトルやポットはお湯が出ないように必ずロックし、子どもの手が届かない場所に置きましょう。
3. 炊飯器から出る蒸気に触れてやけどをすることがあるので、注意しましょう。

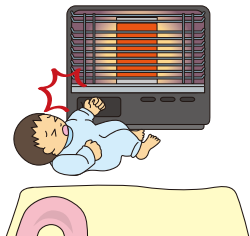


暖房器具や加湿器でのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 床に置くタイプの暖房器具は、子どもの手が届かないよう安全柵などで囲みましょう。
2. 湯たんぽや電気カーペットなどは、長時間皮膚が同じ場所に触れて低温やけどをすることがあるので、長時間使用しないようにしましょう。
3. 加湿器から出る蒸気に触れたり、加湿器を倒して熱湯を浴びたりしてやけどをすることがあります。加湿器の使用時は、ベビーゲートを活用して、子どもに触れさせないようにしましょう。



調理器具や アイロンでのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. フライパンやなべなどの調理器具は、調理中だけでなく調理後も高温のことがあるので、子どもに触れさせないように注意しましょう。
2. アイロンをテーブルや机の端に置いたり、アイロンのコードが子どもの手が届かないようにしましょう。



ライターや マッチでの火遊び

2歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. ライター等を使用した火遊びによる火災事故防止のため、ライターやマッチは子どもの目に触れない場所に保管しましょう。
2. 子どもが操作できないような幼児対策（チャイルドレジスタンス）機能が施された、PSCマーク（※11ページのトピックス参照）付きのライターを使用しましょう。



転落・転倒事故

大人用ベッドからの転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 子どもは寝ている間も寝返りをしたり、動きまわったりして、ベッドから転落し、頭部などにけがをすることがあるので注意しましょう。
2. 寝かすつける時に、添い寝をすることは多いと思いますが、2歳になるまでは、できるだけベビーベッドで寝かせましょう。



ベビーベッドやおむつ替え時の台からの転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. ベビーベッドを使用する時は、常に柵を上げて使用しましょう。
2. ベビーベッドやソファ、施設にあるおむつ交換台などの高さのある場所でおむつ替えをする時は、子どもから目を離さないようにしましょう。



椅子やソファからの転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 椅子や子ども用ハイチェアの上で立ち上がったたり、座ってテーブルを蹴ったりさせないようにしましょう。
2. ハイチェアの安全ベルトは、必ず締めましょう。
3. 椅子で遊ばせないようにしましょう。
4. ソファの上に寝かせて、寝返りをして転落しないように注意しましょう。

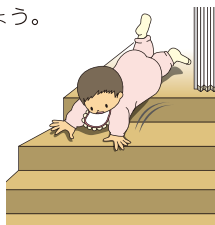


階段から転落、段差での転倒

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. ハイハイをする頃から、階段からの転落が起きるので注意しましょう。
2. 転落防止の柵を付けて、閉め忘れのないようにし、子どもが開けられないようにロックを掛けましょう。
3. 玄関の段差での転倒や、その他につまづきやすい段差がないか注意しましょう。



ベランダなどからの転落

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもだけでベランダに出さないよう注意しましょう。
2. ベランダから身を乗り出すと転落する危険があることを教えましょう。
3. ベランダに植木鉢、椅子などの踏み台になるものを置かないように気をつけましょう。
4. 子どもだけを家に残して外出することは避けましょう。



窓や出窓からの転落

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 窓から転落する危険があることを教えましょう。
2. 窓の近くにベッドやソファなど踏み台になるものは置かないようにしましょう。
3. 網戸に寄りかかると、網戸が破れて転落するおそれがあるのでやめるよう教えましょう。



抱っこひも使用時の転落

< 注意ポイント >

0歳～1歳くらい

1. 抱っこひもの使用時に、物を拾うなどで、前にかがむ際は、必ず子どもを手で支えましょう。
2. おんぶや抱っこをする時や、降ろす時は、低い姿勢で行いましょう。
3. バックル類の留め具や、ベルトのゆるみ、子どもの位置など、取扱説明書を読んで、正しく使用しましょう。



ベビーカーからの転落

< 注意ポイント >

0歳～2歳くらい

1. ベルトは必ず、正しくしっかりと締めましょう。
2. 段差に引っ掛かったり、重い荷物をぶら下げていることでバランスを崩し転倒することがあるので、注意しましょう。
3. ベビーカーで電車やバスに乗る時は、周囲の状況に注意し安全を確認しましょう。



ショッピングカートからの転落

1歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. ショッピングカートに子どもを立たせたり、ショッピングカートで遊ばせたりしないようにしましょう。
2. ショッピングカートの幼児用座席以外に子どもを乗せないようにしましょう。
3. 注意表示等をよく確認して、安全に使用しましょう。



遊具 (すべり台、ジャングルジム、ブランコなど) からの転落

< 注意ポイント >

2歳以上

1. 施設や遊具の対象年齢を守って、遊ばせましょう。
2. 6歳以下の子どもは、大人が付き添い、目を離さないように注意しましょう。
3. 服のひもなどが首に絡まるおそれがあるので、服装やかばんなどの持ち物に注意しましょう。
4. それぞれの遊具の正しい使い方を教えましょう。
5. それぞれの遊具の使い方を守らせ、ふざけて他の子どもを突き飛ばさせないように教えましょう。



ペダルなし二輪遊具、キックスケーター等で転倒

< 注意ポイント >

2歳以上

1. 子どもが足で蹴って進むペダルなし二輪遊具や、キックスケーターは、道路交通法上、道路では使用できません。
2. 必ずヘルメットを着用させて遊ばせ、正しい乗り方を教えましょう。
3. 2～3歳頃から使用できるペダルなし二輪遊具に乗る時は、転倒しないよう、目を離さないようにしましょう。



自動車・自転車関連の事故

チャイルドシート未使用による事故

0歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. 車に子どもを抱きかかえたまま乗ると、衝突や急停車の際に、支えきれずに子どもが腕から飛び出し、危険です。
2. 短時間の乗車であっても、チャイルドシートを使用しましょう。
3. 6歳になるまでは、必ずチャイルドシートを使用しましょう。
4. チャイルドシートは取扱説明書をよく読んで、後部座席にしっかり取り付け、正しく使用しましょう。



車のドアやパワーウィンドに挟まれる事故

0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. 車のドアやパワーウィンドを閉める時は、子どもの顔や手が出ていないか確認し、閉める前に一声かけましょう。
2. 子どもが自分で開閉操作ができないように、ロック機能を活用しましょう。



車内での熱中症

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 子どもを車内に残したままにしていると、特に暑い季節は、車内の温度が上昇し、熱中症になるおそれがあります。
2. 少しの間でも、子どもだけを車の中に残しておかないようにしましょう。



道路上などでの事故

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもと歩く時は、手をつなぎ、白線の内側を歩きましょう。また、歩道を歩くときは、大人が車道側を歩くようにしましょう。



2. 道路に飛び出しをしないことなど、交通事故の危険や交通ルールについて教えましょう。



3. 道路越しに子どもに声を掛けると、飛び出しの危険があるので、声を掛けないようにしましょう。



4. 道路上や道路の近くでは遊ばせないようにしましょう。



子ども乗せ自転車での転倒

0歳～5歳くらい

< 注意ポイント >

1. 法令により子どもを乗せることは、6歳未満で、幼児用座席を設置した場合にのみ認められています。
2. 走行中に転倒したり、大人が降りて子どもだけを乗せたまま停車中に転倒したりすることがあります。乗せる時は、必ずシートベルトを使用し、ヘルメットを着用させましょう。
3. 子どもを乗せたまま自転車を離れないようにしましょう。
4. 子どもを2人乗せる時は、転倒防止のため、「乗せる時は、後部座席から前部座席」、「降ろす時は、前部座席から後部座席」の順番を守りましょう。
5. 抱っこひもやおんぶひもで子どもをおんぶしたまま走行する際も、運転には十分注意しましょう。
6. 自転車や幼児用座席に不具合がないか、定期的にチェックしましょう。

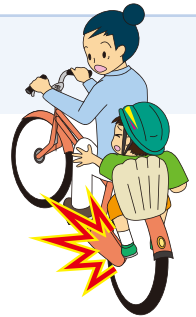


自転車に乗せた子どもの足が後輪に巻き込まれる、スポーク外傷

3歳以上

< 注意ポイント >

1. 法令により子どもを乗せることは、6歳未満で、幼児用座席を設置した場合にのみ認められています。
2. 幼児用座席を使用し、座席ベルトやヘルメットを着用させましょう。
3. 後輪へのスカート等の巻き込みを防止するドレスガードを設置すると足の巻き込み防止に有効です。



トピックス

安全な製品を選び、取扱説明書をよく読んで使用しましょう。

子どもが使う製品は、対象の月齢や年齢に合ったものを選び、取扱説明書や使用上の注意をよく読んで、正しく使用しましょう。また、安全に配慮された製品には様々なマークが付いたものがあります。マークの意味を知って、製品選びに役立てましょう。



PSCマークはProduct (製品)、Safety (安全)、Consumer (消費者) を表し、国の定めた技術基準に適合した製品に付いています。対象製品には、製造又は輸入業者に国の安全基準に適合しているかどうかの自己確認が義務付けられている「特定製品」と、その中で更に第三者機関の検査が義務付けられている「特別特定製品」があります。特別特定製品には乳幼児用ベッドやライターも政令指定されています。



SGマークは、Safe Goods (安全な製品) を表し、一般財団法人製品安全協会が定めた安全基準に適合していることを示すマークです。万が一、SGマーク付き製品に欠陥があり、それを原因として人身損害が起きた場合、対人損害を賠償する制度も付加されています。SGマークの表示対象の子ども向け製品には、ベビーカー、すべり台、乳幼児用ベッド、抱っこひも、幼児用ベッドガードなどがあります。



STマークは、14歳以下の子ども向け玩具に付けられるマークで、「安全面について注意深く作られたおもちゃ」として玩具業界が推奨するものです。一般社団法人日本玩具協会が策定した玩具安全 (ST) 基準に適合している玩具にはSTマークが表示されています。また、STマーク付きの玩具には、対象年齢が記載されています。対象年齢が低い玩具は、喉に詰まらない大きさである、部品が外れにくい、尖った部分がない等、安全性をより配慮した設計になっています。